

法学部に進学される皆さんへ

3年次・4年次開講科目のためのリーディングリスト

東京大学法学部

2015年12月

法学部に進学される皆さんへ

法学部に進学される、もしくは進学を希望しておられる皆さんは、すでに前期課程科目として法学・政治学に関する様々な科目を学んだことでしょう。また2年生の皆さんは、法学部の専門科目も学ばれているものと思います。どのような感想をお持ちでしょうか。

法律学も政治学も、人間社会の中における実践と社会に対する思索との、長い間の蓄積の結果として、現在ある形で存在しています。それゆえ、たとえ最も現代的な問題を対象とする場合であっても、問題自体を理解するためには、その土台を構成している多様な著作や研究業績と取り組む必要があります。法律学も政治学も、多くのものを読むことではじめて、その姿をわれわれの前に現わしてくれるものです。

逆に言えば、皆さんが授業に参加していて、よくわからないと思ったとしても、その授業に関連する研究領域の掘って立つ基礎となる諸著作をじっくり読み進めていくことで疑問が解消し、更に先に進むことができることが少なくありません。

ある科目の勉強を進めていくために何が重要な文献なのか、それは究極的には自分で見つけていくべきものですし、良い文献を自ら発見したときの喜びは本当に大きなものです。しかしはじめて勉強する科目については、読むべきものを探すのも骨が折れるでしょう。そこで、3年次、4年次に開講される講義を担当する教員に、皆さんに読んでおいてもらいたい文献を3点程度紹介してもらいました。すべての講義を網羅しているわけではありませんが、このリストを参考にして、本郷での勉学の準備をしていただければと思います。

それからもう一つ……。推薦する本に、推薦者の個性も表現されます。推薦書とそれにつけられたコメントから、担当する教員がどのような人かを想像するのも楽しいかもしれません。

それでは、ここに挙げられた多くの著作から、一つでも多くのものを手にとってみてください。きっと面白いものを見つけることができると思います。

法学部長 西川洋一

目次

私法	4	基礎法学	7
民法第3部		日本法制史	
商法第1部・第2部		西洋法制史	
商法第3部		法社会学・現代法過程論・法と経済学	
労働法			
経済法		政治学・行政学	8
特別講義 金融諸品取引法		日本政治	
特別講義 金融法		比較政治 I	
		比較政治 II	
公法	6	政治学史・日本政治思想史・現代政治理論	
刑事訴訟法		行政学	
行政法第1部・第2部		現代日本外交	
国際法第1部		特別講義 現代日本政治	
		都市行政学	

法学部に進学する皆さんに読んでおいて欲しい文献

【私法】

科目と担当者名	タイトル	備考
民法第3部 (中田裕康)	<p>①米倉明『プレップ民法 [第4版増補版]』弘文堂、2009年。</p> <p>②奥田昌道『紛争解決と規範創造——最高裁判所で学んだこと、感じたこと』有斐閣、2009年</p> <p>③中田裕康「債権法改正における合意の意義」新世代法政策学研究8号1頁、2010年</p>	<p>①民法の入門書だが、民法第1部・第2部を勉強した後、一気に通読すると、それまでに学んだこと及び民法第3部で学ぶことを鳥瞰することができる。</p> <p>②著名な民法学者が京都大学を退官後、最高裁判事として過ごした期間の仕事と生活について物語る。最高裁がどのようにして判断を示すのかが描かれる。民法第3部との関係では、特に抵当権者の妨害排除請求に関する最高裁判決に関する記述は、読者の関心を呼ぶだろう。</p> <p>民法（債権関係）の改正にあたっての講義担当者の基本的な考え方を述べたもの。批判的に読んでみてほしい。インターネットで閲覧することができる（「新世代法政策学研究」のサイトから入る）。</p>
商法第1部、第2部 (藤田友敬・加藤貴仁)	<p>① 神田秀樹『会社法入門(新版)』(岩波新書、2015年)</p> <p>② 三輪芳朗＝神田秀樹＝柳川範之『会社法の経済学』(東京大学出版会、1998年)</p>	<p>①平成17(2005)年に制定された会社法は、とくに初学者にとっては、技術的でわかりにくいという評価もあるようである。本書は、どのような基本的な考え方に基づいて会社法がなぜ刷新されたのかについて、歴史的背景および世界的な会社法改正に関する動向を踏まえて、会社法のエッセンスについて簡潔に解説する。平成26年改正会社法についても解説されている。会社法の全体構造が明らかにされており、会社法（商法）の講義の導入として格好の一冊であると思われる。</p> <p>②本書は、法律学者と経済学者が会社法を構成する様々な法制度の存在意義を経済学の知見を利用して分析することを目的とした共同研究の成果である。会社法に限ったことではないが、法律学を学習する際には、個々の法制度が存在する理由を理解する必要がある。そのためには、経済学など法律学以外の社会学の知見が有益な場合が多い。会社法は約1000の条文を抱える複雑な法律であるが、本書を通じて、会社法は経済活動のインフラともいえる機能を実際に果たしていることを理解できると思われる。</p>
商法第3部 (後藤元)	<p>① マルク・レビンソン(村井章子訳)『コンテナ物語—世界を変えたのは「箱」の発明だった』日経BP社、2007年</p> <p>② 岩瀬大輔『生命保険のカラクリ』文春新書、2009年</p>	<p>商法第3部で取り扱う商取引法は、実際に行われているビジネス・取引の内容に関する法制度を対象とするものであり、そのため法律論と同じ程度に（もしくはそれ以上に）実際の取引がどのようなものであるかを把握しておくことが重要となる。そのような観点から、法律の専門書ではなく、一般向けの書物を2冊紹介しておく。</p> <p>①は、20世紀後半に国際貿易・国際物流の在り方を劇的に変化させた、いわゆるコンテナ革命に関するノンフィクション、②は、インターネット専業の生命保険会社の経営者による生命保険業界の分析である。</p>

<p>労働法（荒木尚志）</p>	<p>濱口桂一郎『若者と労働―「入社」の仕組みから解きほぐす』（中公新書ラクレ、2013年）</p> <p>赤松良子『均等法をつくる』（勁草書房、2003年）</p>	<p>現在生じている種々の雇用労働問題を、特に若年雇用にフォーカスを当てて、欧米諸国の「ジョブ型雇用」と日本の「メンバーシップ型雇用」という視点で鮮やかに描き出し、今後の雇用政策のあり方も展望するもの。「そういうことだったのか」と目からウロコの本。</p> <p>その立法の是非について国論を二分するほどに賛否の分かれた1985年男女雇用機会均等法。その立法責任者であった著者が、幾多の困難に直面しつつ、立法にまで漕ぎ着けた舞台裏を綴ったもの。官僚として法律を作る苦勞とやり甲斐、様々な利害関係者との関わりなど、興味は尽きない。</p>
<p>経済法 （白石忠志）</p>	<p>① 南野森編『法学の世界』（日本評論社、2013年）</p>	<p>① 憲法、民法、刑法から経済法に至るまで、若く澁刺とした研究者たちがそれぞれ自分の専門分野の魅力をわかりやすく語った一冊。経済法は「競争政策的観点からの規制体系」と題して滝澤紗矢子さんが担当している。</p>
<p>特別講義金融商品取引法（大崎貞和）</p>	<p>① 二上季代司・代田純『証券市場論』有斐閣、2011年</p> <p>① 黒沼悦郎『金融商品取引法入門』第6版、日本経済新聞出版社、2015年</p>	<p>① 金融商品取引法は証券市場をめぐる規制法ですので、それを正しく理解するためには、証券市場の仕組みや意義を押さえておくことが必要です。本書に限りませんが、何らかの概説書を一読しておかれると市場というものが理解しやすいと思います。</p> <p>② 金融商品取引法の教科書や概説書の中でも最もコンパクト。ページ数はそれほど多くありませんが、内容は充実しています。</p>
<p>特別講義 金融法 （神作裕之・神田秀樹）</p>	<p>① 神田秀樹＝神作裕之＝みずほフィナンシャルグループ『金融法講義』（岩波書店、2013年）</p>	<p>本書は、「特別講義 金融法」の過去の講義をその後の法改正等の動向を盛り込んで再現したものである。ところが現在、同講義では、本書の第2章から第4章までの「伝統的銀行取引」すなわち預金取引と与信取引については一定の理解を有していることを前提に説明を省略し、シンジケート・ローンやデリバティブ取引などの現代型の金融取引および監督規制を取り扱う。また、第1章は、金融法の全体像を鳥瞰する。したがって、本書のうちとくに第1章から第4章までを事前に読んでおくことが有益である。</p>

【公法】

科目と担当者名	タイトル	備考
刑事訴訟法 (成瀬剛)	①三井誠・酒巻匡『入門刑事手続法（第6版）』（有斐閣、2014年） ②酒巻匡『刑事訴訟法』（有斐閣、2015年）	①は、これから刑事訴訟法を学ぼうとする学生を対象に、刑事手続の概略と大まかな実態を平易な文章で説明するものである。多数の図表・統計・書式が掲載されており、初学者でも刑事手続のイメージをつかみやすい。欄外に付された参照条文を六法で確認しながら読み進めれば、自ずと刑事訴訟法の条文にも慣れ親しむことができよう。 ①を読了した上でさらに余裕がある場合は、ぜひ②にチャレンジしてもらいたい。本書は、刑事手続の諸制度の趣旨・目的とそこから導かれる法解釈論の筋道を体系的に解説したものであり、現在の刑事訴訟法分野における最高水準の教科書である。
行政法第1部、第2部 (太田匡彦)	①藤田宙靖『行政法入門（第6版）』有斐閣、2013年 ②山本隆司『行政上の主観法と法関係』有斐閣、2000年 ③エバーハルト・シュミットーアスマン（太田匡彦＝大橋洋一＝山本隆司訳）『行政法理論の基礎と課題——秩序づけ理念としての行政法総論』東京大学出版会、2006年	①は、平易で視点のしっかりした議論、その後の高い水準の議論への展開などの点で信頼できる入門書である。講義を聴く前に少しでも準備したい人のために掲げておく。 とはいえ、定期試験後のせつかくの長期休暇であるので、興味のある法分野の論文を読むのも楽しいだろう。②と③は、日本語で読むことができ、行政法それ自体を考える最高水準の著作と目されるものとして選んだ。②は、個人の自由、権利と義務（主観法）、法関係といった観点から行政作用と行政法とを分析したモノグラフ、③は、現代において行政法が直面している課題と行政法的前提を分析し、行政法の展開すべき方向を考察したものと私からは紹介しておく。しかし、広い視野から全体を見通しつつ展開される一貫した緻密な思考を味わい、ここに紹介した以上のことを読みとってもらいたい。
国際法第1部 (寺谷広司)	①H. L. A. ハート『法概念』（第3版、長谷部泰男訳、ちくま学芸文庫、2014年）特に第1、5、6、10章。 ②ケルゼン『純粹法学』（第2版、長尾龍一訳、岩波書店、2014年）特に第1、5、7章。 ③Rosalyn Higgins, <i>Problems and Process: International Law and How We Use it</i> , 1994	比較的時間があまるはずなので、基礎論的立場から国際法を見直すと思われれる。②に代えて『法と国家』（鶴飼信成訳 東京大学出版会 1969年）もほぼ同様の内容。余裕があれば、欧語文献を読むと良いと思う。③の筆者は元ICJ判事で、主要法領域について網羅したイギリスにおける代表的な作品。国際法における「プロセス」を重視する。その他は、教科書及び配布レジュメに記してある参考文献を参照のこと。

【基礎法学】

科目と担当者名	タイトル	備考
日本法制史 (新田一郎)	① 大津透『律令制とはなにか』山川出版社、2013年 ② 平松義郎『江戸の罪と罰』平凡社、2010年 ③ 新田一郎『太平記の時代』講談社学術文庫、2009年	まず、日本史全般についていちおうの知識を持っておいてほしい。文庫・新書等を出している通史的なものでもよいし、高校の教科書を読みなおす程度でもかまわない。その上で左記の3点。講義は中世が中心になるので、比較的手薄になる前後の時代、古代律令制についての入門書として①、近世（江戸時代）の法制度についての概説書として②を薦めておく。中世については手頃な入門・概説書がないので、③を、まあ「おまけ」として。
西洋法制史 (西川洋一)	①村上淳一『ゲルマン法史における自由と誠実』（東京大学出版会 UP コレクション、2014） ② マックス・ヴェーバー『都市の類型学』世良晃志郎訳（創文社 1964） ③エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリー『モンタイユ：ピレネーの村 1294～1324』（上・下）井上幸治他訳（刀水書房 1990-1991）	中世を中心として、西洋社会の歴史に関する本を読んでおくことを勧めたい。 ①は、中世社会に関するドイツの研究史を、それがその中で展開した近代社会の展開との関係において論じたものである。 ②、③は、それぞれ全く異なる学問的前提に立脚しつつ、対象となる中世を中心とするヨーロッパの社会のあり方に迫ろうとするものである。授業に肉付けをするためには、ぜひひとといてもらいたい本の例として挙げておく。
法社会学, 現代法過程論, 法と経済学 (太田勝造)	① 矢野和男『データの見えざる手：ウェアラブルセンサが明かす人間・組織・社会の法則』草思社、2015年 ② 黒木亮『法服の王国：小説裁判官（上）（下）』産経新聞出版、2013年 ③ Joshua Greene, Moral Tribes: Emotion, Reason, and the Gap Between Us and Them, 2014, Penguin Book ④ Oren Bar-Gill, Seduction by Contract: Law, Economics, and Psychology in Consumer Markets, Oxford University Press, 2012	① 21世紀の新しい社会科学の方法の1つの成果 ② 小説であるが、現実以上に現実的な裁判官社会 ③ 進化論による人間観のパラダイム・シフト ④ 心理学の成果に基づく行動経済学による消費者契約の分析と法政策

【政治学・行政学】

科目と担当者名	タイトル	備考
日本政治 (川人貞史)	①川人貞史『日本の国会制度と政党政治』東京大学出版会、2005年。 ②川人貞史『議院内閣制』(シリーズ日本の政治 1, 東京大学出版会、2015年) ③川人貞史編著『新版 現代の政党と選挙』(有斐閣アルマ、2011年)	①日本国憲法によって規定された国会中心主義と議院内閣制の制度理念が矛盾・対立することによって、戦後日本の政党政治がどのように影響を受け、どのような軌跡をたどったかを理論的・実証的に分析した研究書。 ②講義のテキストであり、必読かつ必携である。 ③講義の選挙制度の章のテキスト。
比較政治 I (松里公孝)	①唐 亮・松里公孝編『ユーラシア地域大国の統治モデル (ユーラシア地域大国論 2)』ミネルヴァ書房、2013年。 ②塩川信明・小松久男・沼野充義編『ユーラシア世界 (5) 国家と国際関係』東京大学出版会、2012年。 ③中嶋毅『新史料で読むロシア史』山川出版社、2013年。	①②につき、ここでは政治学に近い巻のみをあげたが、シリーズ全巻に目を通した上で、関心がある論文を拾い上げて読むや見方もある。
比較政治 II (大串和雄)	① 加茂雄三他『ラテンアメリカ』第2版、国際情勢ベーシックシリーズ 9、自由国民社、2005年。 ② 中村正志編『東南アジアの比較政治学』アジア経済研究所、2012年。 ③ 戸田真紀子『貧困、紛争、ジェンダー—アフリカにとっての比較政治学』晃洋書房 2015年。 ④ 酒井啓子編『中東政治学』有斐閣、2012年。 ⑤ 堀本武功・三輪博樹編『現代南アジアの政治』放送大学教育振興会、2012年。	どの地域でもよいので、自分が関心を持つ地域の政治の実態に関する本を読んでおいてほしい。挙げたのは、授業で扱う地域についての例である。
政治学史 日本政治思想史 現代政治理論 (川出良枝・荻部直)	①『岩波講座 政治哲学』全6巻(岩波書店、2014年) ② 川出良枝・山岡龍一『西洋政治思想史—視座と論点』(岩波書店、2012年) ③ 杉田敦・川崎修編『西洋政治思想資料集』(法政大学出版局、2014年) ④川崎修・杉田敦編『現代政治理論』(有斐閣、新版2012年) ⑤渡辺浩『日本政治思想史[十七～十九世紀]』(東京大学出	政治思想に関しては、西洋だけ、もしくは日本だけにしか関心がないとか、古い時代の思想史には詳しいが現代のことは知らないといった態度では、本当の魅力がわからない。特定の地域や時代をこえて、さまざまな思想にふれることが必要なのである。したがってここに挙げたのは、3科目に共通する入門文献と考えてほしい。やや高価なものもあるが、図書館や古書店を使いこなすのも、大学で身につけるべき大事なスキルである。 ①～⑤は基本的な概説書を挙げたが、自分の興味のあるところだけを読

	<p>版会、2010年) ⑥ 荻部直『ヒューマニティーズ 政治学』(岩波書店、2012年) ⑦ シュエス(稲本・伊藤・川出・松本訳)『第三身分とは何か』(岩波文庫、2011年) ⑧ 『新日本古典文学大系・明治編 福澤諭吉集』(松沢弘陽校注、岩波書店、2011年)</p>	<p>むのでも構わない。どの本も文献目録が充実しているから、そこで挙がっている関連書に読み進むと、いっそう充実した読書体験になるだろう。⑥は政治学全般の入門書であるが、政治思想への道案内にもなっている。 また、政治思想のテキストを読み解くための方法を学べる本として、⑦⑧を挙げた(⑧は『福翁自伝』を収録)。どちらも詳細な注と解説がついているので、訳者・校注者の徹底した読みの迫りに驚いてほしい。政治思想についての本格的な勉強は、その驚きから始まる。</p>
<p>行政学 (前田健太郎)</p>	<p>① 戸部良一・寺本義也・鎌田伸一・杉之尾孝生・村井友秀・野中郁次郎『失敗の本質』(中公文庫、1991年) ② 松本三和夫『構造災』(岩波新書、2012年) ③ 山下祐介・金井利之『地方創生の正体』(ちくま新書、2015年)</p>	<p>行政学は、組織が失敗する理由を研究する学問である。その観点から、文庫・新書レベルで主要な論点を学べる著作を三点挙げる。①は第二次世界大戦時の日本軍を対象に、その戦術的な失敗の原因を探っている。②は原子力発電を初めとする巨大な科学技術システムを扱う現代の組織が直面する限界に焦点を当てている。③は「地方創生」をキャッチフレーズとする現在の日本における地域政策の抱える問題について、社会学者と行政学者が対談する形式を取る。</p>
<p>現代日本外交 (現代外交実践講座) (小原雅博)</p>	<p>① ヘンリー・キッシンジャー『外交』(上・下) 日本経済新聞出版社、1996年 ② ヘドリー・ブル『国際社会論 アナーキカル・ソサイエティ』 岩波書店 2000年 ③ 半藤一利『昭和史』 平凡社 2004年 ④ 小原雅博『「境界国家」論』 時事通信社 2012年</p>	<p>① 読み応えのある壮大な近現代外交史。歴史的に形成された米国外交の二つの姿勢がキッシンジャーの卓越した洞察力と筆致で見事に論じられている。英語に自信があり、忍耐力もある方は、原書(英語で835ページある)にチャレンジしてみてください。ちなみに、私は何度か挑戦しましたが、未だ道遠しです。 ② 国際関係論における「現代の古典」とも言える教科書的存在。翻訳上の制約はあるが、簡潔明瞭で理論が苦手な私にも良く分かる名著。 ③ 2003年4月に外務省が公表した極秘文書「日本外交の過誤」を読んだ上で、この本を紐解けば、半藤氏の言う「無残にして徒労な」(敗戦までの)昭和史の教訓を新たにすることができよう。小原雅博『国益と外交』(日本経済新聞出版社 2007年)の第5章も参考にしてほしい。 ④ 大復興する中国とアジア回帰する米国の間位置する日本の戦略は? 外交と内政が渾然一体となって絡み合う今日、日本外交の成否も日本政治の安定と日本経済の再生にかかってくる。アジア外交に汗を流した著者の実践と思索にご批判を賜りたい。</p>

<p>特別講義現代日本政治（谷口将紀）</p>	<p>① 川出良枝・谷口将紀編『政治学』東京大学出版会，2012年。 ② 佐々木毅・清水真人編『ゼミナール現代日本政治』日本経済新聞出版社，2011年。</p>	<p>本講義は4年Aセメスター開講で、日本の政治をテーマとした東京大学法学部における政治学の学習の締め括りを目的としています。本講義を履修するための prerequisite は設けていませんが、これから必修科目以外に政治系の授業を履修する予定のない人、政治学を1から勉強しなおしたい人は、①などで基礎知識を補っておいてください。また、②などを利用して、1990年代以降の日本政治の流れを押さえておくと、講義の理解が容易になると思われます。②の刊行以降の出来事に関しては、今まさに通常国会が行われています。入学試験や定期試験の準備から解放されたこの時期に、国会でどのようなことが議論されているのか、是非一度ご覧になることをお勧めします。</p>
<p>都市行政学（金井利之）</p>	<p>①西尾勝『自治・分権再考』ぎょうせい、2013年 ②大森彌『自治体職員再論』ぎょうせい、2015年 ③今井照『自治体再建』ちくま新書、2014年 ④砂原庸介『大阪』中公新書、2012年 ⑤鎌田慧『六ヶ所村の記録（上）（下）』岩波現代文庫、2011年</p>	<p>①②は、本学の名誉教授でもある都市行政学・自治体行政学の泰斗が、自治体学会において、一般向けに語った10時間集中セミナーの記録である。自治体職員を念頭に語った側面もあるので、自治体現場の実感のない学生には、一部で判りにくいところもあるかもしれないが、全体としては両教授の体系的理論が、平易に語られている。</p> <p>③は、東日本大震災・福島第一原子力発電所の事故に伴い、住民が長期避難することになった事態は、これまでの地方自治観に根本的な問い掛けをするものであった。著者は、「移動する村」という概念をもとに、新たな自治体の姿を探す知的営みをしている。</p> <p>④は大阪という都市に焦点を当てた包括的研究である。都市行政学の前提となるのは、個々の自治体に対する幅広い関心と知識であるが、しかし、全国にある都市・農村の多数の自治体は、それぞれに多様で特徴的である。大阪という巨大都市に、気鋭の研究者が取り組んだ様子を体感できる。</p> <p>⑤も「寒村」である六ヶ所村という特定の自治体に焦点を当てたルポルタージュであるが、こうした情報は、研究者の著作よりは、ジャーナリストによる著作の方が、はるかに質量ともに豊富である。その代表の一つとして、非常に古いがあえて採り上げてみた。というのは、原書は1991年であり、筆者が学部を卒業して研究を志した初期に出会った著作の一つであり、個人的に思い深いものだからである。</p>